

## 「実践者のための」論文の書き方コーチング」実施報告

紀要編集委員会では、大会 2 日目の 6 月 17 日（日）午後、「実践者のための」論文の書き方コーチング」を実施した。本講座の趣旨は、学会誌上でより多くの優れた国際理解教育実践の成果を共有するために、主に実践者を対象に、実践を研究論文・ノートにまとめる際のポイントや基本的な執筆の作法等について伝えるものである。今回は、昨年 8 月の東京での開催に続き、第 2 回目となったが、研究大会時での開催ということもあり、予想を上回る約 40 名の参加があった。小・中・高の各学校で勤める教員の他、地域で活動する方も参加された。具体的なプログラムは、次の通りである。

まず、紀要編集委員会の桐谷正信委員長による開会の挨拶の後、石森広美委員より「実践を研究論文にするために」と題した共通講座が行われた。実践者が論文を執筆する際に陥りがちな点や留意すべき事項について、自身が実践研究論文を執筆した経験と査読を担当した経験の両面から、わかりやすく話があった。その後、「実践研究ノート」（参加者約 10 名）と「実践研究論文」（参加者約 30 名）の 2 コースに分かれて、桐谷委員長、橋崎頼子委員の進行の下、コーチングを行った。各コースでは、それぞれ 3 つの講義と演習を行った。成田喜一郎委員からは、「実践者が実践研究ノートを書く意味」「実践者が実践研究論文を書く意味」をテーマに、実践を振り返ることや記述することの意義について、自身の経験に基づく話があった。見世千賀子委員は「実践研究ノートを査読する視点」「実践研究論文を査読する視点」について 5 つの視点からポイントを解説した。太田満委員からは、「実際の論文を使つての演習」として、まず自身の実践研究ノートや実践研究論文への投稿経験談が語られた。次に、少人数のグループで、実際に太田委員が執筆（投稿）した原稿を使って、査読を試みるという活動を行った。グループで意見交換をした後、太田委員より原稿についての査読者の見解が解説された。最後に、再度一会場に集合し、全体を通しての質疑応答が行われた後、桐谷委員長から今回のコーチングを活かしてぜひ多くの方に学会誌に投稿してほしい旨のエールが送られ、本講座を閉じた。

アンケート結果より、参加者からは、次のような声が多く聞かれ、概ね好評であった。

- ・研究ノートも論文もまだ書いたことがないのですが、書くにあたっての留意点がとてもわかりやすく、今後の参考になりました。特に査読体験は、客観的に見てみると気付く点が多いという学びにもなりました。
- ・書き方の基本を習った後で、査読演習があったのは、効果的であった。
- ・大変気づきをいただいた講座でした。論文にチャレンジしようという気持ちを持ってました。

紀要編集委員会としても、コーチングを通して、今後、実践研究論文・ノートの投稿および掲載数が増えることを期待している。次回は、夏休み中に京都で実施する予定である。